

〔シンポジウム趣旨説明〕

地域文化遺産としての歴史的景観

— その保存と活用に関する歴史地理学からの提言 —

戸祭由美夫・内田忠賢

まず、本シンポジウム開催の経緯について説明すると、2004年の秋に、来る2005年～2006年の二年間にわたる共通課題にかかわって、学会本部から戸祭に「シンポジウムを企画してくれないか」との依頼があった。それに基づいて戸祭は、2005年7月初旬の奈良大学での大会開催の前後から、集会担当の小野寺常任委員と発表者や発表テーマに関する戸祭試案をもとに相談を重ねるとともに、それ以前から本シンポジウムの企画にかかわってきた内田も正式にオーガナイザーとして加わり、「地域文化遺産としての歴史的景観—その保存と活用に関する歴史地理学からの提言」というシンポジウムのタイトルのもとに、2005年秋には本日の発表者とコメントーター計11名の方々に報告ないしコメントをお願いした次第である。ご快諾いただいた各位には、ご発表の要旨を事前にオーガナイザー経由で全員に周知いただくなど、発表内容を着々とご準備いただき、予定通り6月25日にシンポジウムを開催することができた。

さて今日、学会活動には、地域社会との具体的な連携や貢献が求められており、地理学の属する人文科学とて例外ではない。このような社会情勢の中にあって、地理学は現代的課題にも積極的に立ち向かい、実証的な分析を通して、社会的に意義ある研究を行ってきた。人文地理学の主要な一分野である歴史地

理学も、過去の景観や地域空間のシステムと機能を論じながらも、現代につながる問題意識を共有してきた。しかし、歴史地理学の従来の研究成果に対し、一般社会の評価や認知度は、残念ながら必ずしも高くなく、私たち研究者側からの社会的発信も活発であったとは言いがたいのが現状といえよう。

そこで、わが歴史地理学会では、これまで以上に、現代的課題にも目を向け、その成果を地域社会に積極的に発信し、魅力的な提言を行う必要があろうと考える。その際には、他の研究分野との連携や協力も欠かせない。幸い、これまで地理学界では、自然系と人文系の連携や協力が至極当然のこととして行われてきたし、歴史地理学の場合には、歴史学や考古学と従来から研究交流があり、建築史学・都市計画学・造園学など工学系の諸分野とも研究連携を行いつつある。歴史地理学会が数年前に取り組んだ災害をめぐる共通課題では、理学系の地球科学に属する火山学とも連携した経験を有している。

ところで、周知のように、2003年7月に政府は「美しい国づくり政策大綱」を発表し、翌年6月には景観法が制定された。すでに、1960年代から全国的に歴史的町並み保存運動がスタートしており、また、法制度としては、都市計画法に基づく美観地区、風致地区および伝統的建造物群保存地区などの地区指定制度や、古都における歴史的風土の保

存に関する特別措置法による地域指定などが施行されている。このたびの景観法は、かかる従来の行政施策を更に前進させて、景観そのものを総合的に保存・活用しようとする施策といえる。

かかる立法・行政施策との関わりで、他の研究分野の動きを見てみると、例えば建築学界では、早くから歴史的町並み保存運動に関して数々の成果を挙げ、1990年代からは、近代化遺産や産業遺産の名のもとで、明治以降の記念的建造物の保存と活用に積極的に取り組んできたことも、社会一般によく知られている事実である。さらに世界的規模でいえば、ユネスコが認定する世界遺産には文化的景観が重要な柱となっており、様々な分野の団体が世界遺産の登録やその保存と活用に活動している。

歴史地理学も、歴史景観ないし歴史的景観を重要な研究対象のひとつとして多様な研究成果を積み重ねてきたものの、これらの動きへの関わりに出遅れたことは否めない。出遅れたというよりも、その学術研究活動についての社会的アピールが不足していたと言うべきであろう。実際、古代の都市や条里などの土地割、中世の荘園、近世の城下町など、その調査・発掘・プラン復原や保存活動に、数多くの歴史地理研究者が関わってきた。にもかかわらず、その活動・貢献が必ずしも世間的にも目立って評価を得ていないのは、世評獲得への良い意味での本学界の禁欲さが、社会的発信のブレーキとなったように思われる。しかし今や、より積極的に学術的成果を社会一般に伝えなければならない時期に来ているのではなからうか。

そもそも歴史的景観は、個別の地域において、それぞれの自然環境のもとで社会環境とも深く関連しつつ、地域社会の人々が営々と築き上げてきた、地域に根ざす文化遺産であり、地域の歴史と結びついた、人間の貴重な活動の結果である。見方を変えて言えば、そ

れら景観自身が、文字資料・絵画資料・考古学的遺物と並んで、地域の人々の営為を物語る重要な歴史資料にほかならない。このような認識は、都道府県史や市町村史(誌)といった地域史の編集に当たって、歴史的景観ないしそれと密接に関わる古地図や地割復原図も地域文化遺産として重視され、通史編や史料編から独立させた巻が割り当てられるようになってきたことにも如実にあらわれている。

一方、社会の急激な変化に伴い、地域文化遺産としての歴史的景観が消滅しつつあるのも事実である。かかる状況に対して、従来は、文化財として記録に残すことで社会的意義を果たしたと考えがちであった。しかし、歴史的景観が日本文化の中で重要な位置を占めるとすれば、それらを調査・研究することにより、地域住民がその重要性に気づかないままに歴史的景観が消滅していくのを防ぎ、さらにその単なる保存に終わるだけでなく、より積極的に歴史的景観を活用して、次世代に引き継ぐべく地域社会に資する方策を考えねばならない時代に入っている。政府が主唱する「美しい国づくり政策大綱」もこのような考えを支えるものであり、文化庁が取り組む「国土における良好な農村空間の保全」や「地域環境に根ざした地域づくり」は、具体的な施策の方針を示すものといえる。本年度大会の第一日目(6月23日)に近江八幡市文化会館で催された公開講演会の冒頭に、近江八幡市の川端五兵衛市長が旧市街地の八幡堀の保存に関して、当時の行政担当者とのやりとりも交えつつ、具体的に自らのご経験を話されたが、まさしくその先進的な好例といえよう。

歴史景観ないし歴史的景観を主要な対象の一つとして長年にわたって研究成果を積み重ねてきた歴史地理学界にとって、近年の日本の政府・自治体におけるこのような新たな基本方針や施策により、学界の社会的な認知度をようやく正当なレベルに高める機会が到

来したといえる。2005～2006年度における本学会の「景観の保存と活用の歴史地理」という共通課題は、地域の活性化、社会教育面での活用、一般社会への学問的発信など、私たちの学会による地域社会への貢献や連携に大きなステップとなるに違いないと信じる。

2006年度のシンポジウム「地域文化遺産としての歴史的景観 — その保存と活用に関する歴史地理学からの提言」を私どももオーガナイザーは、以上のような問題意識のもとで企画した次第である。

本シンポジウムの課題に関わる研究は、多くの研究者によって多方面からさまざまな地域を対象として積み重ねられ、対象とする時代や具体的なテーマの点で質的にも量的にも膨大といえる。そこで、それぞれの研究発表は、このような研究の蓄積に配慮して、扱う時代も古代から近現代まで、テーマ的にも都市的な面と農山村的な面の双方から、扱う地域も日本各地にとどまらず、国際的な比較の視点も取り入れることとした。さらに、歴史地理学からの今後の研究に幅広さと社会性をもたせるべく、隣接分野の建築学からの発表と社会教育ないし文化財行政の現場からの発表も加えることにした。そのため、従来のような研究報告とそれに対するコメントとい形式を採らず、シンポジウム全体の時間的制約から発表時間こそ40分と15分の2区分としたが、それぞれオリジナルな内容・見方となるよう発表者にはお願いした。

すなわち、午前中は、日本の古代から近現代までわたって、近畿地方の古代宮都、中部地方の特異な農村景観たる輪中、北海道の開拓地、の3事例に関して各40分の研究発表を、近畿の城下町、中国地方の特異な産業文化景観たるタタラ製鉄跡、の2事例に関して各15分の研究発表を、それぞれしていただいた。午後からは、海外を対象として、ヨーロッパの中でドイツとスペインの事例に関して、40分と15分の研究発表をしていただき、

さらに建築学の分野から今回のシンポジウムのテーマに造詣の深い上野邦一氏に40分のご発表を、自治体行政の面から関東地方と近畿地方の2事例について、千葉県と京都府の担当者からそれぞれ15分ずつご発表をいただいた。最後に、長年にわたる研究成果を踏まえて行政へのアドヴァイスにも実績のある金田章裕氏に総合コメントを願い、全体討議を行うことにした次第である。

以上、本シンポジウムでの多様かつ多面的な発表を通して一残念ながら1日間という時間的な制約から、当然取り上げられるべきテーマ、例えば古代の条里、中世の荘園、あるいは集落景観としての散村、といったテーマが欠落しているもの — 歴史地理学会の更なる発展、とりわけ社会的な認知度の向上に資することを念願して、オーガナイザーによる趣旨説明の結びとしたい。

[本シンポジウム特集号の編集について]

シンポジウム1日という時間的制約のために発表時間に「研究発表」40分と「コメント」15分という差を設けたものの、オーガナイザーとしては発表のテーマ・内容そのものに差別を設ける意図は全くなかったので、「研究発表」と「コメント」の原稿にも形式・内容上の差異を設けたくないと考えた。そこで、本特集号では、一応、従来の特集号や一般の巻号の編集方針を勘案して、掲載論文の長さを40分の「研究発表」の場合は刷上り15頁程度以内、「コメント」の場合は刷上り5頁程度、「総合コメント」は刷上り8頁程度で、発表者各位に執筆をお願いしたが、特に「コメント」の場合は刷上り10頁程度まで許容することとし、一方、「研究発表」の場合でもかなり少ない頁数の論文も受け入れ、全てをシンポジウム当日の発表順に配列した。シンポジウムの特集号は、各回ともオーガナイザーの意向に沿って特色ある編集が行われてきたこともあり、今回の特集号の

かかる編集にも会員諸氏のご理解を賜りたい。

(戸祭：奈良女子大学文学部)

(内田：奈良女子大学人間文化研究科)

〔付記〕

本シンポジウムの開催とそれに基づく特集号の編集に当たって、研究発表者・コメントーターを快くお引き受けいただき、その発表・コメントの内容に基づく玉稿を遅滞なく執筆くだ

さった11名の方々（その中には、非会員の上野邦一・原田三壽の両氏、あるいはこの機会に本学会会員になっていただいた方もおられる）、シンポジウム当日の座長団としてオーガナイザー以外に加わっていただいた山田志乃布(法政大学文学部)・椿真智子(東京学芸大学教育学部)の両氏、そしてシンポジウムの開催・運営にあたっていただいた実行委員会や地元の各機関・団体ならびに学会本部事務局に対して、シンポジウムのオーガナイザーとして心からお礼申し上げたい。

Introduction to the Special Issue : Proposal on the conservation and Utilization of Historical Landscapes as Regional-cultural Heritages from the Viewpoint of Historical Geography

TOMATSURI Yumio and UCHIDA Tadayoshi (Nara Women's University)

The symposium named "Proposal on the conservation and utilization of historical landscapes as regional-cultural heritages from the viewpoint of historical geography" was held at Kinro-fukushi Center, Ohmi-hachiman City, Shiga Prefecture, Japan on June 25, 2006. In this symposium five reports and six comments (including a general comment) were read. This special issue is compiled from ten papers based on the above reports and comments and discussions.

Key words: Historical landscape, Regional-cultural heritage, Historical geography